

## 論文審査の結果の要旨

氏名：小 林 克

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：近世物質文化の考古学的研究

審査委員：（主査） 教授 濱 田 晋 介

（副査） 教授 上 保 國 良 教授 大 塚 英 明

教授 山 本 孝 文

本論文は、日本の近世遺跡（17世紀初頭から19世紀第3四半期）と同時代の世界の遺跡から出土した資料について、その生産・流通・用途・変遷等を明らかにすることを目的としている。本書で扱う資料は近世特に江戸出土資料を中心としていることもあり、従来は考古学の研究方法と文献学の研究方法から、対象資料の分析を行うことが多かった。しかし、出土資料と同じ「もの」を分析資料とする民具研究が存在し、民具の生産や用途、名称などを明らかにしてきた成果も存在する。考古学的手法と文献からの研究法及び民具の研究法は、分析のための研究方法はそれぞれ独自のものではあるものの、分析対象を「もの」資料に限定した場合、用途や歴史を明らかにする目的は共通する。こうした過去に生産・使用された「もの」の用途や歴史を明らかにするとともに、「もの」から過去の人びとの営みを解明していく歴史復元を試みる方法を、「物質文化研究」と名づけ、この方法で近世社会を解明していくことを主眼とした研究方法を採用した。具体的には近世遺跡から出土した資料の考古学的な分析・資料批判を行ったうえで、この資料に対して文献・絵画資料などの史資料や、民具研究で扱われている資料との対比を試みた。また、必要に応じては分析対象資料に対する聞き取り調査や生産地の観察なども行い、分析対象資料との関係性や系譜を検討していった。こうした本論文での目的・意義・研究史・研究法の提示を行ったのが第Ⅰ部であり、第Ⅱ部・第Ⅲ部では提示した分析方法を用いて、国内での出土資料である「ボウズ」「照明具」「火打石」「今戸焼」「瓦漏」、海外での出土資料も含めた「キセルやクレイパイプ」「茶の道具」「瓦やレンガ」を対象に検討を行った結果が示される。

第Ⅱ部では「ボウズ」「照明具」「火打石」「今戸焼」「瓦漏」それぞれについての研究史を提示した上で、生産構造や流過程、用途と変遷等を明らかにしていった。その結果、「ボウズ」は用途が「手あぶり（暖房具）」と誤認されていたが、真綿のばしの道具であり、時間とともに形態的な変化を遂げることを提示した。また、多種多様な照明具を分類しその変遷を整理し、各資料の灯火具の位置づけを行った。「火打石」では発火具としての用途を前提として、遺跡出土資料の使用痕跡と大きさ・文献での記述、産出地の調査を通して、近世から現代までの生産・流通・使用の実態を明らかにした。「今戸焼」ではこれまでの研究史を整理するなかで、実態が不明瞭であった該当資料に対して、窯の発掘調査事例・絵画資料・伝世資料・聞き取り調査などを行い、不明な点が多かった「今戸焼」の実態把握を行った。さらに用途不明であった近世遺跡出土の土器が、砂糖生産道具である「瓦漏」であることを、文献史料・内外の絵画資料・出土地と絵図面との対比等を通して実証した。

第Ⅲ部では近世における海外と日本との交流の深さを反映して、海外で生産された資料が日本で出土し、あるいは日本製資料が海外で出土する事例が多く存在することに注目し、その意義を解明しようと試みた。その前提として、近世日本の中心地であった江戸と深い関わり合いをもつオランダ・アムステルダムと、発掘調査の成果を基とした当時の都市としての比較を行い、出土している遺構・遺物について確認した。その結果都市開発やインフラの整備などにおいて両都市の共通性が確認され、嗜好品についての共通性も多くあることが判明し、日本製・オランダ製（和蘭製）の道具が相互の地で存在することも理解した。これを踏まえ、まずは日本とオランダの喫茶具について考察した。「キセルとクレイパイプ」はどちらも喫煙具で、刻みタバコを使用する点で共通する。しかし、オランダのものは土製でありキセルとは材質や大きさも異なっていた。このクレイパイプの江戸での出土状況を検討し、オランダ商館長の江戸参府の際に贈答用とされたとする文献の記述を裏づけるものと結論した。また、金属製のパイプ（キセル）もアムステルダムで出土していることを確認すると共に、タイのオランダ商館、中南米アンティル諸島、ブラジル、

沖縄などでも出土していることに触れ、日本のキセルの成立に影響を与えた可能性が、オランダだけではないことを示唆した。また、オランダと日本の関係を量的に裏付ける資料に陶磁器があるが、これまでの現地調査を通じてその出土の特徴を分析した。その結果、オランダにおける東洋陶磁器は磁器製品に需要が多く、コーヒーやチョコレートなどを「飲む」ための器種に偏っていることを示した。喫茶具に関するこうした相互出土は、近世のオランダ東インド会社を仲介とする日蘭貿易に負うところが大きい。その関連施設であるタイ・アユタヤオランダ人居住区、台湾ゼーランディア城、平戸・長崎・出島などに注目し、これにオランダ各地・ロンドンなどで出土したレンガ・瓦などを分析し、その共通性と差異性について分析を試みた。その結果、アユタヤ、ゼーランディア城、平戸・長崎・出島でオランダ製のレンガが確認され、オランダ式棧瓦がアユタヤで出土していることが判明した。従来鎖国のイメージのある江戸時代においても、オランダをはじめとして諸外国の「もの」が存在していることは、考古資料や文献史料からも言われてきたところであるが、オランダ各地での日本製と思われる「もの」が確認できたことで、物質文化の交流を一層際立たせたとしている。

第I部から第III部で展開された、近世の遺跡出土をもととした物質文化研究の「まとめ」にあたるのが第IV部である。ここでは成果の確認とこれからの展望が述べられ、本書でとりかかった物質文化研究の課題を示している。そして結論として、近世遺跡から出土する考古資料をもとに歴史復元を行うためには、本書で示したように、考古学の研究方法とともに、文字資料・絵画資料・民具資料と、その「もの」に付随する研究方法を駆使して分析する、「物質文化研究」の重要性を強調している。

本書はこれまで述べてきたように、この「物質文化研究」の方法を用いて、近世遺跡から出土した遺物の用途、過去から現代までの系譜、流通の実態に対する多数の新事実を明らかにしてきた。また、同時代の海外の遺跡の出土品との比較から、具体的な相互交流の様相を明らかにした。そしてこれを踏まえ、近世（17世紀初頭から19世紀第3四半期）における、世界のなかでの日本の位置づけを、従来の見解に比べ実証的・具体的に明らかにした点に、本書の最大の学問的意義がある。ここで提示されたあらたな研究方法とともに、日本考古学研究上でその貢献は大きいものである。

以上の理由から、本論文は学位（文学）に値するものと認められる。

以 上

平成28年1月21日